

Title	Vasari "Vite"の成立について：その初版と第二版との関係
Sub Title	
Author	相内, 武千雄(Ainamu, Muchio)
Publisher	三田史学会
Publication year	1941
Jtitle	史学 Vol.20, No.2 (1941. 11) ,p.53(239)- 64(250)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19411100-0053">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19411100-0053</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# Vasari "Vite" の成立について

—その初版と第二版との關係—

相 内 武 千 雄

(一) ヴァザーリは彼の著 "Vite" 所謂『美術家列傳』<sup>(三)</sup>

をファレンツェ公コシモ・デ・メディチに獻じた。

しかし、この大著編纂の最初の動機を與へたもの

は、コシモ公ではなく、カーディナル・ファルネ

ーゼ及びその側近の人々であつた。即ち一五四六

年或る夕、ヴァザーリはファルネーゼの許に伺

候して、ジョヴィオその他側近の親しき友と共に、

ファルネーゼの夕の食卓に侍つたのである。これ

へば、次の如くである。

「この頃、余は、日が暮れて夜になると屢々、

赴いて、既に記したかのカーディナル・ファルネ

Vasari "Vite" の成立について (相内)

ーゼの御食事に侍つた。そこには、常に、モルツ

ア、アニバル・カロ、ガンドルフォ、クラウディ

オ・トロメイ、ロモロ・アマゼオ、ジョヴィオ、

その他數多の學者や録々たる人物が——かのカー

ディナルの宮廷は常にこれらの人々によつて満た

されてゐるのであるが、集つて、その場に相應し

い美しい種々の話を以て彼をお慰め申し上げた。

或る晚のこと、とりわけ、ジョヴィオの美術館の

ことと、そのなかに並べられてある美しい銘文を

備へた著名な人々の肖像画のことに話が及んだ。

かやうにして、あれこれと色々、話が取交されて

あるうちに、ジョヴィオは、彼の美術館と彼の

Elogien に加へて、チャマブエから現代に至る迄の造形美術に於ける優れた人々に關する論文を作ると  
いふことが、常に彼の大的なる希望であつたし、  
又、現在でもやはりさうであると語つた。<sup>(八)</sup>これに  
關して彼は詳しく述べ、わが美術關係の事柄に  
於いては、確に、博識と一家の見を有してゐること  
を示した。勿論、彼の論するところは大體に止  
まつて、それ故、細かなところをみてゐなかつた。  
又、彼が美術家について語つたときは屢々、名や  
姓や生國や作品を取違ひたり、或は又、事態の現  
實の姿を語らずに寧ろ大づかみに話をしたのであ  
る。ジョヴィオが彼の話を終つてしまつたとき、  
カーディナルは余の方に面を向けて言はれた。

『お前はそれでは、いま挙げた美術家の總べ  
てと彼等の作品について、年代順の一覽表と  
整理した覺書とを彼にやるがよからう。さす  
れば、その上お前のおかげでお前の藝術もこ  
の恩惠を蒙ることにならう』

『お前の意見はどうかね、ジョルジオ。それ  
は立派な製作になるまいか、さうして、骨折  
り甲斐のあることではなからうか。』

『墓に立派でござります、閣下』と余は言葉  
を返した。『もしも、ジョヴィオが誰か美術に  
携はつてゐる者から力を藉りて、事柄を正し  
く整理して、事の眞の事情を傳へるならば、  
と存じます。私がかやうに申しますわけは、  
この彼の話は素晴らしいものではありました  
が、事柄を取違へて相互に入替つてあること  
が澤山ありましたからでござります。』

カーディナルはジョヴィオ、カロ、トロメイそ  
の他の人々の願に答へて、

『お前はそれでは、いま挙げた美術家の總べ  
てと彼等の作品について、年代順の一覽表と  
整理した覺書とを彼にやるがよからう。さす  
れば、その上お前のおかげでお前の藝術もこ  
の恩恵を蒙ることにならう』

と仰せられた。余は、それが余の力以上のもの  
であることを認めはしたが、欣んで余の能ふ限り  
なすつもりであることを約した。かやうにして、

余は、それに關して若年の頃より一種の慰みと愛着から我が美術家の想ひ出のために自論んでおいて、書留めたり、書き綴つたりしたものと、そのものとのノートも余には貴重なものであつたが、隈なく検し始めた。余はこの目的に適ふと思はれたものを悉く纂めて、それをジョヴィオに呈した。彼はこの勞苦を非常にほめて、余に言ふには、

『ジオルジオ君、君が全部をかやうに書き上げるといふ困難な仕事を引受けたものからひたい。といふのは、私の見るところでは、君が十分にそれをなすことが出来るだらうと思ふからです。私はいろいろの流派についての知識もなく、君が知つてゐる多くの細かなことも知りませんから、私にはそれをしようといふ氣持はありません。兎も角、私が自分でそれをやつても、せいど、ブリニウスのやう

な遣方で、短い論文を作る位のものでせう。  
（九）  
私の言ふ通りにし給へ、ヴァザーリ君、私がこんなにいふのは、君はそれに立派に成功すると思ふからです。立派な見本を君は今、この敍述を以て私に見せてくれたではあります  
んか。』

しかし、彼には、余がこれに對して本當に決心したやうには思はれなかつたので、カロ、モルツア、トロメイ、その他余の親しい友人を通じて余を説得した。かくて、余は決心し、出來上つた曉には、それを友人の一人に與へて、眼を通して訂正を受け、さうして余以外の別人の名を以て出版してもらふといふ考で、遂に着手したのである。』

ヴァザーリは當時、既にその名、世に高く、製作に多忙な作家であつた。それにも拘らず、「列傳」の敍述は短年月の間に著しく進歩することが出来たのである。それ故に、我々は、十年、或はそれ

(一〇)

第二十卷 第二號 (三三)

五六

以上の年月を假定しなくとも、彼が十分の準備を以て、この敍述編纂に當つたことを推定し得るのである。

一五四七年、即ち、ファルネーゼの食卓に於ける會談に際してヴァザーリがこの「列傳」編纂の動機を與へられた翌年には、彼はこの仕事の試作を、事實、アニバレ・カロに渡すことが出來たのである。カロはヴァザーリに與へた返信のなかで、その文章と内容をほめ、たゞ自然の語法に反すると思はれる獨特の文體のところを非難したに止まつた。ヴァザーリが自己の傳記のなかに記してゐるところに從へば、この時迄(一五四七年)に書き上つたものを彼は、リミニのオリヴィエトの修道院長ジアン・マテオ・ファニタニ(Don Gian Matteo Faetani)に託し、ファニタニはヴァザーリに向つて、それを彼の寺の寫字生に清書させ、又彼自らそれの校訂を行うことを約したのである。

その際に彼は又、「既に美術家列傳の書は著しく進歩して、今や、余には綺麗に清書してもらふより外には、殆んどなすべきことがなかつた」と記してゐる。故に、我々はヴァザーリ自身の編纂事業はこの時既に十分涉つてゐたことを知ることが出来るのである。この時行はれたファエタニの校訂がどの程度のものであつたかについては、ヴァザーリはその傳記のなかで少しも言及してゐない。しかし、ヴァザーリの友人乃至知己は、ファエタニやボルギーニに止まらず、その史料に於いて、その編纂に於いて、援助を惜まなかつたことは事實である。しかも、これらの援助は何らヴァザーリの創作に對して本質的變化を與へなかつた。彼は彼に提供される總べてのものを自ら作り變へ、彼特有の文體に總べてを嵌めこんでいつたからである。ヴァザーリの援助者の問題と並んで、編纂者をヴァザーリ以外の者に歸せしめんとする説

が、既に早くからあつた。即ち、ヴァザーリの友人の一人、シルヴァーノ・ラツィ（D. Silvano Razzi）をその編纂者となす説である。この説は、シルヴァーノの兄弟、セラフィノ（D. Serafino Razzi）自身によつて、ドミニカ派の聖者に關する文書のなかに於いて提出されたものであるが、今日、フイレンツの Biblioteca nazionale に現存するシルヴァーノ・ラツィの文章なるものは、一六一五年の印刷許可の檢閲を得たる “Compendio delle vite de' pittori” であつて、即ち“ヴァザーリの「列傳」第二版の出版後になされたる下手なそれの抜萃にすれないのである。

「列傳」印行の事情については、ヴァザーリは同じくその傳記の別のところで次のやうに語つてゐる。即ち「そのうちに、コシモ公が、余の有らん限り最大の熱心を傾けて、又、余の二三の友人の援助を得て、今や殆んど書き終てしまつてゐるた列傳の書を刊行し、印刷に附することを望まれたので、余はそれを宮廷の印刷人、ロレンツォ・トレンティノに渡した。かくして印刷が始まつたのである。しかるに、法王パウロ三世が崩せられたときには、未だ理論的部分は出來上つてゐなかつた。そこで、この書の印刷が終らないうちに、フイレンツェを出立しなくともよいものか、どうかについて、余は迷つた」とある。<sup>(一五)</sup> 法王パオロ三世がなくなつたのは、一五四九年十月十日である。この時、ヴァザーリは遂にローマに赴かなかつた。彼がユリウス三世の即位の報を聞き、新法王に仕へるべくローマに着いたのは、<sup>(一六)</sup> 一五五〇年の二月七日から廿一日迄の間であるから、この間に、理論的部分も出來上り印刷の進行も摵ることが出来たと思はれる。

かくて「美術家列傳」の初版はトレンティノによつて印刷され、一五五〇年に世に出た。全體は

二卷三部より成つた。彼は、Trecento 及びそれ以前、Quattrocento, Cinquecento に屬じて、全體を三つの parti に分けたのである。彼はギベルティ以来の美術史敍述のファレンツィ的傳統を墨守して、既に亡くなつた藝術家、その發展の既に終つた者のみを取扱つた。<sup>(一七)</sup> これの唯一の例外をなしたもののは僅にミケランジェロのみであつた。

その存命のうちに既に不滅の名聲を獲得したミケランジェロは、當代にとつて、就中、ヴァザーリ自身にとつて偉大な英雄的存在をなしてゐたのであつて、有らゆる發展がそこに集り、そこで完結する項點となされたのである。かういふ敍述展開の纏りの點に於いて、この初版はその有する多く品たり得たとされるのである。

第二版は初版の印行より十八年の後、即ち、一五六八年に、此度はジョンティに於いて印刷され

て、世に出た。<sup>(一八)</sup> ヴァザーリはこの間に著しく見聞をひろめ、知識を増すことが出来たのである。全多數の作品にも接して彼の見解を豊かにすると共に、蒐められた史料や文獻を通して、彼の歴史的良心は強められた。嘗て犯された輕卒や間違が訂正されたのである。かくて例へば、ニコロ及びジョヴァンニのピザーニの如きは、初版に於いては遙か時代の下るアンドレア・ピザーノの弟子とされたのであるが、今や獨立の一章が與へられて、畫家としてのチャブニ、建築家としてのアルノルフオと共に彫刻家として、「列傳」の敍述の開幕を果すことになつたのである。

ヴァザーリに於ける見聞、知識の増加、新しい史料の使用の結果として、第二版は敍述の變更を含むのみならず、多くの書足しを加へた。それはかりではない。その上に新しい傳記が、數多、附

(一九) 加された。第一には、新に鬼籍に入つた美術家の

傳記が、次いで、それにも増して、尙ほ存命中の

者の中の傳記が附け加へられ、彼自身の傳記も、それ

は勿論、無味乾燥の極めて断片的な自傳ではある

が、缺けてはゐなかつた。書物の體裁は、更に、後代のものの刺戟として、又、鑑として、ヴァザーリが特に彫らせた美術家の木版の肖像画によつて高められた。<sup>(二〇)</sup> それ故に、ヴァザーリにとつては、

彼の力によつて附け加へることの出来るものは、

もはや、これ以上残つてゐないと、公言することが出来たのである。<sup>(二一)</sup> しかしながら、かういふ附け

足しはヴァザーリにあつては、單に機械的に加へられていつたのであるから、敍述の量的増加は、從つて、嘗ての敍述の纏り、その一貫性を遙かに缺くに至つた。嘗て初版をコシモ公に奉つたとき<sup>(二二)</sup> に、文士としての賞讃よりも藝術家としての藝術的努力に對する賞讃を願つたヴァザーリは、今や、

逆に、己が認められたる文士であることを感じる。

彼は屢々、初版に於ける新鮮な自然らしさを犠牲にして、文體や文の調子の改善に努力を拂ふ。初版に於ける纏りは破れてしまつた。我々は彼の努力とその新に蒐められた史料に對して感謝を拂ふと共に、著作家としてのヴァザーリの姿は初版に於いて遙に純粹に、遙に藝術的に表現されてゐたことを思ふのである。

ヴァザーリの「美術家列傳」が我々に對して持つ重要さは、彼がイタリア美術史に對して試した史的發展の史觀にある。彼は各々の美術家の傳記を物語の調子を以て始めていつた。傳記記述の仕方で順を追ひ、目錄體を以て作品にふれていくのである。しかし、その間に、時には物語によつて中斷され、隠されてしまふこともあるが、一つの歴史的發展を展開しようといふことが試られる。重要な美術家の傳記は相互に關係しあひ、相互に補

足しあひ、又、彼等の多くの傳記の前に附された個人の總體觀ともいふべく簡単な手引のなかに、發展の契機が特に著しく現れてゐる。別にヴァザーリは、各時代に於ける美術の發展を述べたかなり長い序文を彼の書に附した。それは勿論、彼が事實から、或は、彼が事實と考へた事柄から抽出出し、又、彼が哲學的思索を以て組立てたものであるが、この發展史的の理論——ミケランジェロの時代に於いてその最高の頂點を求める——は、

彼の書にあつて、全く新しいものであり、これが、

近代に於ける有らゆる美術觀察の最初の基礎となつたのである。(これはひどく、稿を改めて他日を期したいと思ふ) ——一九四一・三・三—

註

1' Giorgio Vasari (1511—1574) せ Arrezzo の出れ、家世古より織陶を業とし、やんから家族の姓の Vassio を出でる。彼の著作家の素質は夙に彼のアーティス

的教養に胚胎してゐる。彼は少年時代よりアートに通じ、  
初版は 1550 年、ヘンリッヒ・ロレンツォ・Torrentino による「Le Vite de' più eccellenti Architetti, Pittori et Scultori Italiani da Cimabue insino a' tempi nostri descritte in lingua Toscana da Giorgio Vasari pittore Aretino, con una sua utile & necessaria introduzione a le arti loro の題題を帶び」11巻の編み而成り、第一巻は第一編及び第二編を、第二巻は第三編を成る。但真十九二頁に及ぶ。第二巻は 1568 年、ヘンリッヒ・Giunti が出版したもの。Le vite de' più eccellenti Pittori, Scultori e Architettori, scritte da M. Giorgio Vasari Pittore & Architetto Aretino di nuovo

その故郷アレッジアに於いてはヘアリベト・Pallastra に於いてイッポリト・Medici の學友として十三歳を受けたのである。美術家としては、最も多く「ケラント」に傾倒し、畫家及び建築家として活動した。しかし、彼は畫家としても建築家として遙に優れてゐる。著作の主なるものは、アーティスの彼自身の住宅に於いて現れる。建築家として、Uffizi (ヘンリッヒ)、S. Stefano (マサニ) の鐘塔の様、Badia (マントヴァ) 等の作品が、トスカーナに於ける後期ルネサンスの優れた製作に屬する。

ampliate, con i ritratti loro, et con l'aggiunta delle Vite de' vivi et de' morti, dall'anno 1550 insino al 1567. ① 脊題を有す。三編の総合版は、第一卷は初版から第三卷まで、第二及第三の巻が、第一卷は複数版へ擴大された第三卷を包む。全頁 1011 頁に及ぶ。後半の版は、ハドーの第三版を底としてなれど、なかで Milanesi 版 (1878—85. 9 Bde.) 及びそのたゞ一編の版は、A. Gottschewski u. G. Gronau 版 (1904—1916) ② ヘタリ編譯が體ねども (Giorgio Vasari : Die Lebensbeschreibungen der berühmtesten Architekten, Bildhauer und Maler.) ③ がトキモ一編だ。

トキモ Kallab, Vasaristudien (Quellenschrift für Kunsts geschichte. N. F. XX. 1908) が最も詳しうる。次にドリスの Julius v. Schlosser ④ Materialien zur Quellenkunde der Kunstgeschichte. V. Heft. Vasari. が詳しうる。これは遺憾ながら Kallab の脚本と異なる。 Cosimo de' Medici [Cosmus Medicus Magnus] (1519—1574). せ1用川中井の「アラム・シルバ」、又1用川大母の後はトベカーナ大公として表記した。又、蘭德ヨハンの「列傳」の母の彼自身の傳記のなかに現ぐる。前記の Palazzo Vecchio に於ける壁畫 Uffizi の建築、その他の彼の活動はかくして始ひたのである。アレッサンドロ・カルラーラがローマに宛てた書簡に於ける、藝術保護者としてのアリティ家の権を保つての庇護の下に美術の復興を圖るの藝術家の輩出が、これを説いて、これを明にしてゐる。この書簡は「列傳」の初版に附されたものであつたが、第三版に於ても再び轉載された。

Vasari "Vite" の最初の二編 (異文)

トキモ教母を継承して名のじぬけた。この傳記の下に記す。カルラーラは「列傳」の母の彼自身の傳記のなかに現ぐる。前記の Palazzo Vecchio に於ける壁畫 Uffizi の建築、その他の彼の活動はかくして始ひたのである。アレッサンドロ・カルラーラがローマに宛てた書簡に於ける、藝術保護者としてのアリティ家の権を保つての庇護の下に美術の復興を圖るの藝術家の輩出が、これを説いて、これを明にしてゐる。この書簡は「列傳」の初版に附されたものであつたが、第三版に於ても再び轉載された。

トキモ Cardinal Alessandro Farnese (1520—1589) ⑤ Pier Luigi Farnese の事跡、同名の教母 Paolo III の事。1用川母十用歳にしてカーナナルに出立する。バウロ三世の劣る、素烈な藝術保護者でもあつた。彼の名は因んで冠せられた Villa Farnesina、畠や、リラウベリ世の財政的援助者である Chigi の娘としてハトムロの壁畫を以て有る Palazzo Chigi を買ひ取つたのも彼であれば、Vignola の「Gesù」を建築させたのも彼である。カルラーラは「列傳」の母の彼自身の傳記のなかに現ぐる。他の藝術保護者としてのアリティ家の権を保つての庇護の下に美術の復興を圖るの藝術家の輩出が、これを説いて、これを明にしてゐる。この書簡は「列傳」の初版に附されたものであつたが、第三版に於ても再び轉載された。

トキモ Pastor : Geschichte der Päpste. Bd. V. S. 727—728° カルラーラの記述は1用川年以後のものである。トキモ Giovio 及び Bindo Altoviti の通じてある。Paolo Giovio 及び Bindo Altoviti の通じてある。

か。一五四六年にはカーティナルを驚歎させた Palazzo Cancelleria の彫刻、品や、ペクロ川の生涯を繪描ける所謂 Sala dei cento Giorni の絵画がある。

H' Gottschewski=Gronau 著、Vasari: Die Lebensbeschreibungen. Bd. VI. S. 374—375.

大、「ルの壁」と記してゐるのは、品が、前記 Cancelleria の會議室の壁畫の製作に從事してゐる點のことを示す。この製作は、カルロ・田世の特派使節として赴いたカーティナル・フルネーザの歸國を迎るために田論されたものであつて、それ故、極度に製作を急かし、ヴァチーリは僅か百日を以て之を仕上げた。その完成されたのは一五四六年十一月十三日であつた。ホトガーリ自身、この壁畫については詳しく述べてゐる (Gottschewski=Gronau 版、前掲書、第六卷、三七〇頁—三七三頁)。又、Pastor 前掲書、第五回、七七一頁—七八〇頁。

H' Francesco Maria Molza (Molsa) 1489—1544. はカーティナル・フルネーザの許に出入した詩人の一人である。彼の死去の年月が一五四四年二月であり、且つ、彼はこの頃、約一年間、ローマにゐなかつたところからして、Scoti=Bertinelli の論じてゐるところに従へば、ヴァチーリの述べたる「食卓の會議」は、一五四二年から四三年くかけた冬にヴァチーリがローマに滞在した期間に起きたものである (Gottschewski=Gronau 著、前掲書、第一回、三七〇頁—三七三頁)。

Caro, 1507—1566 は當時の最も有名な作家であつて、初の Caro の秘書を勤め、次いで亦、秘書として、彼の死後、カーティナル・フルネーザに仕へた。この期間に彼が書いた無數の手紙は、當時の重要な史料をなすばかりでなく、トスカーナ語の範本とされる。

H' Paolo Giovio (Paulus Jovius) 1483—1552. 當時の有名な歴史家。カッカヤオの美術館の所長では、彼が故郷のナビリ一五三六年から四三年にかけて建てたものであつて、若し頃から蒐集した文學史や戰史の上の名高い人々の肖像畫が、やのだから陳列されたのである。Elogien ふるいの Elogia virorum literis illustrum, quotquot vel nostra vel avorum memoria vixere et prostrerentur などである。前者は歴史上の後者は文學上の人士を扱ひ、兩者共に傳記的性質を持つたものであつて、最初は、前記肖像畫の説明書として考へられたのであるが、後からは、文と畫と兩者を一つにした版も世に出た (Basl, 1575, 1577)。又、説明文のみは既に一五四八年にハイレンクカリに於いて出版された。

ヴァチーリはこの Elogien とのことは餘り知らなかつた

ぬ」。又、彼の遺稿のなかに見出された當代の美術史に

關する傳記的草稿は、明に *Elogia doctorum virorum*

と、1 節をなす美術史敍述の準備をなすものである。この個  
の「カーネギー」は、Hasse : Die italienische Renaiss-  
ance S. 233—238, Pastor 前掲書、第一卷第 1 章、  
111 頁—114 頁、E. Fueter : Geschicht, der neu-  
ren Historiographie. S. 51—55。

又 C. Plinius Secundus, 23—79. ドラリウスのやうな遺方  
ド……ルーレーの本、ナウルス出来上りた有名な Na-  
turalis historia を挙げてゐる。これは一種の博物  
誌であるが、範囲は極めて廣く、宇宙に對する數學物理  
學的敍述を含んでゐるかと思ふが、地理學や土俗人種學の  
敍述も存する。このなかに、美術史的敍述も含まれてゐる  
やうだ。ドラリウスの本は古世を通じて廣く讀まれ、  
イタリア語には、1573 年 Cristoforo Landino によって  
翻譯されたが、それより 110 年前即ち Lorenzo Ghiberti  
のイタリア語で書かれた Commentarii の第 1 章は、アリ  
ニウスの人名表に從つて古代藝術の概觀を與へてゐる。ア  
リニウスの「列傳」のなかにドラリウスを引用してい  
るが、それは出典としてアリニウスの Commentarii を題じ、  
又 Giovanni Battista Adriani を題じてある。

10. Julius v. Schlosser ドメヌス「我々は」彼（アリニ  
ウス）の本題は少へる。1490 年迄讀むといふ確實な手

掛かりを有する」。Schlosser 前掲書、六頁。

11. Schlosser 前掲書、六頁。ヴァザーリは「列傳」の初  
版を奉つた際のカーネギーの書簡のなかで、彼の文體より  
して寛容を乞ひ、美術家の文筆と云ふのは物を明瞭にう  
へし、又優しく調子で書くには出來ないかのだと述べ、  
彼自身の文體の特別なことを認めてゐる。(Gottschewski-Gronau 版、前掲書、第一卷第 1 章、XII)。

111. Gottschewski-Gronau 版、前掲書、第六卷、III 中六頁  
—III 中七頁。

111. Vincenzo Borghini, (1515—1584) は當時の好古趣味  
を有するトマソ・ランツァンティドヌ、蒐集家であった。ヴァザーリ  
とは親交あり、彼の “Libro” はカーネギーによると謂ふが、  
又前代の巨匠達の素描をシテガーリは彼の蒐集を以て模寫  
するところが出來た。シテガーリのため Paulus Diaconus  
のハノンベルク史の抜萃を作つて與へたのも彼であれば、  
「列傳」初版の母體を監督してやつたのも彼であつた。シ  
テガーリの援助者はその他にも多數あつたが、なかでも、  
その持つてゐるハノンベルクの Commentarii の手稿を利用  
された Cosimo Bartoli、シテガーリの他にシテガーリ教示  
を與へた Fra Marco de' Medici, Danese Cattaneo 等  
が舉げられる。Annibale Caro, Adriani なども亦このな  
かに入れられるべきか。殊にシテガーリは「列傳」の第  
11 版の爲に、古代美術に關する知識の欠陥を補ふためにア

ムラトーリの方面の書局の著者を記りた。それが *Lettera di M. Giovambattista Adriani* といふ「序論」の記述をなす筆者と書簡を交わした。Giovanni Battista Adriani, 1513—1583 セーベンヌラの生れ、1545年大學の教授、歴史家として知られる *Istoria de' suoi Tempi* の著者名だ。

### 11. Schlosser 記者著 中頁 十三—廿四頁 Silvano Razzi (ca. 1530—1611) を紹介する Girolamo と隸し、後に Silvano となる。彼が僧職に在りて、數種の劇や傳記を著した。彼は外見で、私は殆んど知るところがない。

11. Gottschewski=Gronau版「前掲書」第六卷、三八六頁。一六、彼が謝肉祭に際してアントラウバ川半島の辺を闘か、彼は直ちにセーベンヌラに勝たとおどりラウバの手元に倒れる。ローマに上りたる（註11用意図）。

11. ムラトーリの「序論」の先驅をなすものと、Ghiberti: Commentarii 及び Libro di Antonio Billi (Cod-Maglib. XIII. 7. 89, XXV. 7. 636) が、彼の長所たる筆の如きの特徴を Anonymous Magliabecchianus (Gaddi) 氏の藏書本のヘンナラの Biblioteca nazionale にせざりたる所、やがて又 Anonimo Gaddiano と記され、

Cod. Magliab. XVII. 17 など) その著者と重複する。彼の筆は、筆の如きの筆者と重複する。彼は第二版のローマ宮殿の著者と記され、(Gottschewski=Gronau版「前掲書」第一卷第一編、XVI—XVII)。

11. 第二版を奉ねたるローマの書簡のなかで、かつての筆者と凡そ二十年位の年の差がある。それが、むねに時間的に少しある。「序論」母の直前に著された。この筆者と、Adolf Philipl: Begriff der Renaissance; Schlosser: Materialien zur Quellenkunde der Kunstgeschichte, II, III, IV, V; Fabriczy: Filippo Brunelleschi.

11. 第二版もが、ローマ公に獻された。第二版出版の事情については、右の版を奉るためのローマ公の書簡、及ぶ、畫家の獻體のなかで、カトモード自身の筆へ渡してある。兩者共に第二版に、初版のローマ公の獻體と共に轉錄されている。

11. 新に附加された傳記は Cinquecento たゞ三十四を算くる。

11. ルネサンスの肖像画は、ローマー、ティアド作られたのとある。ルネサンスの肖像画は、カトモード自身餘り感心しない。彼は第二版のローマ宮殿の著者のなかで出のりんと記し、(Gottschewski=Gronau版「前掲書」第一卷第一編、XVI—XVII)。

11. 第二版を奉ねたるローマの書簡のなかで、かつての筆者と凡そ二十年位の年の差がある。それが、むねに時間的に少しある。「序論」母の直前に著された。この筆者と、Adolf Philipl: Begriff der Renaissance; Schlosser: Materialien zur Quellenkunde der Kunstgeschichte, II, III, IV, V; Fabriczy: Filippo Brunelleschi.